

清水 展、『文化のなかの政治：フィリピン「二月革命」の物語』弘文堂，1991，234p.

本書は、非専門家を読者として書かれたいわゆる一般書である。しかし、「フィリピン二月革命」についての独創的かつ大胆な分析・解釈を提示しているため、内容はきわめて水準の高いものとなっている。本書のもとになったのは著者が1987年から1990年の間にいくつかの学術雑誌に公表した4つの論文である。評者もその都度読んでいたが、今回単行本として読んでみて、清水氏の「二月革命」分析が現代フィリピンを対象とする政治学に対してもきわめて刺激的であることを改めて認識した。以下、本書の紹介をかねて、そのことを論じてみたい。

著書は第一章（出来事と物語）で、本書の問題意識は次の2つであるとする。すなわち、第一が、「アキノ暗殺がなぜ、そしていかに彼らを街頭での行動に駆り立てていったかを明らかにする」こと。第二が、「そうした運動の高揚と持続がもたらした大統領選挙の繰上げ実施に際して、政治指導者としての信頼性も知名度も低かったコラソン・アキノ夫人が、なぜ既成の政治家において突如として野党の統一候補となり、マニラのみならず全国的にも圧倒的な人気と支持を結集することができたのか」を明らかにすることである。「しかしながらベニグノ・アキノの暗殺とコラソン・アキノ夫人の出馬という、マルコス政権の打倒をもたらしたふたつの重要な出来事の政治的意味に関して納得のゆく説明は」、いまだ十分に与えられていない。「したがって本書の課題の第一は、ふたりをそれぞれの時点における政治状況や政治運動の最もふさわしい象徴として選び出すようなフィリピンの文化的背景を明らかにすること」であり、課題の第二は、「そうした象徴を通して状況理解のための物語が紡ぎ出されてゆくような象徴的效果、あるいは意味作用の具体的な過程を明らかにすることである」というのである。

換言すれば、著者が本書での「考察の対象とするのは、政治的な諸勢力の個々の利害をめぐる競合や

衝突、妥協という表層の政治力学ではなく、一般民衆個々人の精神的世界の深みであり、その在りようである」。「アキノ自身の生前のさまざまな言動のなかで、なぜ特定の言動のみが事後的に掘り起こされて脚光を浴び、自ら予告した死の甘受という殉教物語が作られて巷間に流布するのかという問題についての考察は、いまだ十分になされていない。そのことを理解するためには、〈物語生成装置〉とも呼ぶべきカトリシズムの役割を十分に理解しなければならない。こうして著者は第二章（文化の深い神話）、第三章（殉教の詩学）、第四章（聖コリーを待つ時間）の各章において、いかに現代のフィリピンにおいても〈物語生成装置〉としてのカトリシズムが重要な役割を果たしているかを具体的に明らかにしていくのである。そして第五章（ピープル・パワーの精神世界）で次のようにいう。「エドサ通りに築かれたヒューマン・バリケードが生み出した状況を、単にピクニックやフィエスタ、あるいはカーニバルと捉える者もいる。しかし、そうした表層に示された陽気な雰囲気の基層に、カトリックの信仰によって意味づけられた精神世界が存在していること、あるいはそうした点が強調され語られること、それゆえに政治的行動であると同時に、宗教色を色濃く漂わせている点が、ピープル・パワーの最大の特徴なのである。現場の点景として見出される聖職者や聖像、時に唱えられる祈りや賛美歌、路上のミサの参加体験、あるいはそれらの見聞をとおして、野次馬や見物人も含めたその場の状況の全体をカトリシズムの枠組みのなかで把握し物語の言説が、もっとも強い説得力を持つ点にフィリピン固有の政治文化の特徴が顕著に現われているということが出来る」。

こうした清水氏の分析は、従来主として政治学者によって提示された「二月革命」分析とはいくつかの点で際立った対比をみせている。政治学者がこの政治変動を分析するとき、必ず、なにがこうした「革命」をもたらした要因であり、この「革命」の結果、なにが変わったかを明らかにしようとする。そうした分析のなかでもっともすぐれたものが、日本人によるものでは藤原帰一氏の論文<sup>1)</sup>と白石隆氏の論文<sup>2)</sup>であり、外国人によるものではベネディクト・アンダーソンの「フィリピンにおけるカシケ民主主義」<sup>3)</sup>であろう。しかしながら、「二月革命」を真正

面から論じたというよりは、フィリピンの「民主主義」とはどのような性格のものであるかを、中国人メスティーソを担い手とした寡頭制の成立と展開という観点から明らかにしようとしたアンダーソン論文を別にすれば、藤原論文、白石論文とも「革命」から五年を経た今日では、その仮説と分析によって十分論じ尽くせなかった局面があったことがある程度明らかになってきている。まず白石論文の場合は、タイ、インドネシアの権威主義体制との比較という枠組みで論じているため、フィリピンの「二月革命」をある普遍性をもった発展途上国の政治変動のバリエーションとしてはほぼ正確に位置づけているものの、それゆえに、フィリピン的な文脈との関連での意味づけが弱いといわざるをえない。一方、藤原論文は、その点ではフィリピン的な文脈にも配慮しながら、しかも、それを制度としての民主主義から運動としての民主主義へという、ユニークかつ普遍性をもつ仮説で説明しようとしたところが、きわめて斬新であり、フィリピン研究者だけでなく、広く日本の政治学者一般にも強い影響を与えた。しかし、もし「ピープル・パワー革命」によって藤原氏のいうように「市民社会」が形成されたのであるならば、どうして現在のような政治的混乱をフィリピン社会は繰り返しているのかという素朴な疑問に行き当たらざるをえなくなるであろう。

清水氏は政治学の立場からのこうした優れた分析を意識しながら、「二月革命」の「物語的理解」を試みることにより、政治学的な構造論的分析あるいは過程論的分析が抱える方法論的隘路をいとも簡単に突破してみせた観がある。それが、もっともよくう

かがえるのが上にも引用したエドサのヒューマン・バリケードについての記述である。あのお祭り気分のような雰囲気を見て、なかば呆れ、「二月革命」のもつ意義についていささか懐疑的になった外国からの観察者は少なくない。しかし、あれこそがフィリピン的な政治参加のあり方であって、ああした政治参加を非本質的としてしまつては、フィリピン人の政治生活のもっとも重要な部分が否定されることになる、評者自身以前から感じていた。清水氏は、それを単なる「コミュニタス」論としてではなく、フィリピンの聖週間の宗教的行事などとの関連において、非常に明解な意味づけを与えている。この箇所だけでも、本書は日本人によって書かれた最良のフィリピン政治文化論であるといつても過言ではない。また、本書は、フィリピン研究全体からみても、イレートの『パシオンと革命』<sup>4)</sup>と同様、多弁・雄弁なフィリピン人の政治指導者たちの繰り出す言葉が、まさに一般に広く思われているように、その場限りのものではなく、他の国におけると同様、場合によっては「言霊」として、聞く者、さらには語り手自身をも拘束することがあるということを実証しようとした試みであり、その意味では、とかくフィリピン研究者がインドネシア研究者などに対して抱きがちなある種のコンプレックスが見事に払拭されている。他ならぬ日本からこうした高水準のフィリピン政治文化研究が出たことを素直に喜ぶたいと思う。本書が一日も早く英語に翻訳され出版されることを期待したい。

(片山 裕・岡山大学)

1) 藤原帰一。1988。「フィリピンにおける『民主主義』の制度と運動」『社会科学研究』40(1): 1-94。  
2) 白石隆。1987。「上からの国家建設——タイ、インドネシア、フィリピン」『国際政治』日本国際政治学会(編) 84: 27-43。  
3) Anderson, Benedict. 1988. *Cacique Democracy in the Philippines: Origins and Dreams*. *New Left Review* 169: 3-31.

4) Iletto, Reynaldo C. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.